View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Kansai University Repository

関西大学学術リポジトリ
Kansai University Institutional Repository

『哲学詩集』第五回

著者	トンマーゾ カンパネッラ, 澤井 繁男
雑誌名	關西大學文學論集
巻	68
号	1
ページ	29-62
発行年	2018-07-30
その他のタイトル	Tommaso Campanella, Poesie Filosofiche, Numero 5
URL	http://hdl.handle.net/10112/16268

『哲学詩集』第五回

トンマーゾ・カンパネッラ著
澤井繁男訳

30　自然愛の対象である至高善についてのカンツォーネ

マドリガーレ　1

森羅万象を善と悪で表わしうる限り、それは美ないしは醜だと言われている。部分的にも全面的にも、不死なる生命（いのち）や死そのものの原因となったりその配剤をしたり手助けをしたりする限り、万有は悪徳かあるいは有徳だと称されている。というのも、至高善もしくはその他の至高なるものは調和しにくいからだ。このものはなべて愛を目標にしているし、片や、それらのものは動いたり拍車をかけたりされることを忌み嫌う。あらゆる善と美は愛し評価したり、憎み軽視したり、極悪にみえたり醜悪に思われたりする、または反面、好意を寄せるさまざまひともいる。なぜなら至高善は和（なご）みを与えてくれたり華をもたらしたりするからだ。どのような存在でも退屈にせず、いつも平穏無事

へと誘う。独りのときも他にひとがいてもみずからに徳があれば充分なのだ。お互い愛し知り合って、炎が渦巻くように高みへと燃え盛る。

〈解題〉

このマドリガーレで謳われている通り、「善と悪」、「美と醜」、「有徳と悪徳」が選ばれて、その有り様が説かれている。

マドリガーレ　2

食材を調理してそれを空腹なひとたちに振る舞う、パラスとウェヌスは文句を言いながら口にして、わが身のための栄養を摂取する、都市、そこはひとびとの暮らす場で、食の好みも多様だ、減量と戦いに挑んでいるひともいる、それは他の大勢の市民にとっても有意義なのだ。至高善でさえ神慮を移動させることは出来ないし、革の綱をつかってみたいと思っても無駄なのだ。だが、生きることはつねに駆け抜けることを指す、わが身や名誉や息子たちのなかに痛みを与えて危機意識を植えつける、だから反対に寛ぎのときを得た場合には周章狼狽する。こうしてわれわれはいま、栄誉を打擲して、目下、逆に気晴らしをしている。なぜならその三つを学んで子供たちと行動をともにするからだ。だからパラスはウェヌスともバッカスとも関わりを持たずに自分自身で愉しんでいる。でも女神は抜け目がなく誇り高き神で姿を現わさない。仮に胃袋が空っぽなら女神がいっぱいにしてくれよう。ときたまだが残忍な苦痛を目のまえに突きつけもする。

〈解題〉

パラスはアテネの守護神。ウェヌスは美の女神。バッカスは酒の神。このマドリガーレは「食材云々」を例えに挙げて、人生（生きること）が至高善だと述べている。というのも学問研究は、パラスやウェヌスと関係していて、共和国にあって活気を帯びるからだ、という。国民は共和国のために戦って死んでゆくが、それは目的がはっきりしているからなのだ。

マドリガーレ　3

互いに生きるときには自刃するひとも出よう、己や子孫や作品が著名でも寿命を越えては生きられないものだ。われわれにとって生きるということと、自身の生き方とは相いれない。変化はいつでもつきまとい、増強減少を繰り返す。それは死を表わしている。なにものかを失いつつ国家は力を伸ばしてゆく。ある種の行為、分量、実体、そして暴力をともなうならば、苦痛がもたらされる。歓喜とは本来的に運命であって、歓ばしいものなのだ。過去、現在、未来は確実で確かなものだ。もし力に訴えたら痛ましい結果となろう。だから己も含めた死とは、ぼくをはじめとしてみずからを消去することである。

〈解題〉

あらゆる運動とは生と死に類する。特に暴力を伴う場合には痛ましさがもたらされよう。昔日のことがらが悪とみなされるのなら、未来もその度合いの分だけ変容するであろう。死と判断されるものは変幻自在である。しかし、現在は不動ゆえに歓ばしい。

マドリガーレ　4

慈悲深い霊魂や死そのものに仕えることは、人間が野獣に変化してチーズのなかで勉学や行動を起こすことへと変容する意味なのだ。立派に小カトーのために命を落とす、ブルトゥスはまともでない息子たちによって死へと追い詰められる。彼の偉大な容貌を仰いで、その目的が達成されたとき、ウエルギウスが間違いだらけの文章を自著に書いたので、詩人の名声は地に堕ちた。不名誉な栄誉を背負って生きてゆく人生はつらい。霊魂の死などないと叫びながら栄光に充ちた真の一生を送る。貴族たちが象を殺すとき、歓喜がネロ帝を包む、タイ王国では、女性たちが長生きしたいと漠然と望んでいる。そのような願いには、四大が変化することでやはり死が訪れるのだ。名声のうちに生きるひともいれば、天上界で生きるあまたのひともいる。

〈解題〉

小カトー（前九五―前四〇年）はローマ共和国時代の政治家。共和制の伝統を保持。ストア主義者。ブルトゥス（前八五―前四二年）古代ローマの政治家。カエサル暗殺の首謀者。ウエルギリウス（前七〇―前一九年）古代ローマ最高の詩人。ネロ帝（在位　五四―六八年）治世の前半は善政だったが、後半は苛政となって混乱が起こり、自刃して果てた。

マドリガーレ　5

意志は最高善ではないと証明されていている。意志が堅固でも食料がないとひとは生きてゆけないからだ。意志が

確かでも性交には至らないからでもある。食材、性交ときて三番目は美で、その次が善なのだ。愉快な気分のために、たとえ学問が第一でも、善が意志を求めようとして、ぼくたちを誘うことがある。そしてこのことによって世界の最高善が創造される。というのも、善は事物を一層良い状態に保つよう気を配るからで、最高善にしてみれば（つまり、世界での）、好悪をともなった作業なのだ。即ち、これはぼくたちに感覚がないならば、自然は味覚だけに関心を注ぐことになる。

〈解題〉

このマドリガーレは訳出の上でとても難しかった。一行目の「意志」が「最高善」でない、という文言が全体を支配している。「善」は、「食材」、「性交」、「美」のあと、四番目に位置づけられている。「食材」と「性交」が上位にきていることはカンパネッラの視座がうかがえる。

マドリガーレ　6

富、血、名誉、子供、そして家臣は善ゆえに幸運を授かる、けれどもあなたが破滅することは、名前であれ祖国であれそれらが混じり合ったものであれ、動物たちを不安に陥れる。肉体に関しては、空がいっそう優美であるおかげで、仕事、健康、強靭、美しさが映えわたる。傲岸は許されるが、その許可が乱用される、きわめて大きなものにたいして小さなものは順番にしたがって後ろに置かれる、あらゆる善のなかでは霊魂の徳性が掌のなかに収まる。話が進行中の折や歓びに浸っているとき、悪に充ちてくる。勇武であってもそれはあらゆる能力の蚊帳の外なのだ。思慮なしでは道案内が出来ず分別なくば秩序も手にし得ない。思慮分別なくば、理念のある存在を惹きつけるのも不可能

だ。善を明らかにして、さらに不純を消し去ると、わが身はみな美をまとう。

〈解題〉

このマドリガーレも「善」と「美」の関係を扱ったカンパネッラらしい作品だ。最初の二連で幸運なる善が、ときに保たれずに悪となって訪れることもある、と述べている。

マドリガーレ　7

わが身でもその子供たちでも生きることは自分を忘れて何かに専心する善を意味し、活動するという言葉も、名声や誠実と同じく栄誉なのだ。その言葉の傍から陽気とか歓喜、それに富が出来（しゅったい）しそのせいで甘美さか労苦のいずれかが賦与される。もしある種の行為を取ることで哀しみに打ち沈み不正な趣をかもし出すなら、他人事だから愉快に思われるとしても、悪とないまぜとなった善とそこで相まみえる。それゆえ、正気で利益を得る者は蓄えることで歓びを見出す。それらを破棄する者には懊悩が訪れる。大胆な言い方をすれば、仮に腐敗した水を好み、それゆえにいっそうの悲劇がやってくるのなら、言語は精気や苦悩をともなって救済してくれる。さて、出産の際、難産ならば、言葉を尽くしても無駄であろう。

〈解題〉

難解な詩である。要するに、なんらかの方法なしでは「愉快・歓喜」は見つからない、とことを述べていると思われる。

マドリガーレ　8

死を迎えなくてはならない人生はやはり辛い。死が全身全霊にわたって苦しみを与え、歓びがぼくたちに愛をくれないなら、苦痛は消え去らない。生には偶然がしばしば伴うものだ。それは歓喜がたまたま死にいたるようなものだ。これは感覚の問題で、知覚作用が生と死を伝えてくれると理解すればよい。歓喜もこれに当てはまる。かくして仕合わせは感覚にしたがっていて、生きることを助けていると結論づけられる。このため、この世には、役に立つか立たないかの二つの事柄を把握するべきだ。というのも、畢竟（ひっきょう）、諸事実は万物のために創られた世界の諸部分だからだ。森羅万象は神のために在り、変容するのは運命で、それは死を意味する。だが多くの哲学者たちは無理をしてでも、神に近づこうとしている、よりいっそう永遠な生を得んがために。

〈解題〉

読んですっと頭に入って来る内容で煩雑な解説は不用であろう。「生と死」の問題を「歓喜」という言葉で巧みに表現している。

マドリガーレ　9

歌謡で唄われるだろうよ、次のことが。人間だけが下なる野獣となり、思慮なくば善が悪となる。歓喜を感ずるいとまもなく悪が善になるときもある。感覚が不純な霊魂を持つのではなく、眼鏡でぼくたちは他の霊魂の存在を確かめる。純粋というものは、みずからのためにではなく、知識のあるひとに用いられる。こうして仕合わせを手に入れ

るのだ。関連文書によれば、ぼくたちはかくのごとく生きている。もしぼくたちの言うことを聞くのなら、無知のひとも知識を得られるだろう。あらゆる不幸に耳を傾けるのでなく、あまたの善のひとたちのなかで悪は善となるのだ。おそらく次の段階を踏んで純粋を獲得するのだろう。知はさまざまなかたちで隠れていて再生を果たすからだ。永遠の太陽が存在のよすがとなる。善も悪も噛むと甘美な味がする。

〈解題〉

このマドリガーレは知覚が善を取らえて善のなかで悪を回心させることがポイントとなっている。比喩で語られているので、このことを読み取るのは簡単ではない。

31　形而上学的な至高善について

マドリガーレ　1

存在じたいが至高善であり、欠くところ、不足するところとて何ひとつなく、他者に危害を加えない。つねに万有をあまねく愛し、己にたいしてもそうである。なぜなら普遍的な実体は己に向けてすべての愛情を示し、かつ耳も澄ますからだ。存在は無限であり、われわれ人間は死を賭して純粋無垢に獲得せんとするのはほかでもない、存在に内も外もないからだ。無が介入する可能性が高い。それゆえ、ときどき実体は変化するのである。森羅万象である存在にとって、広大な空間は存在なるもの裡に潜む礎であり、安寧の場でもある。神によって神のために神の裡で、万有はみな一となる。それぞれが神から遠い距離に在る。有限から無限へ、内に身ごもり外から囲饒（いにょう）されることは意味の

上で等しい。神の裡で神のために生きる。われわれにとって、海に降り注ぐ雨が絶えることがないように、無限の神もその御姿をおみせにならないのだ。

〈解題〉

存在や原因に潜む普遍的な淵源は至高善の発端に位置する。至高善じたいは永遠なるもので、不足や恐怖はひとつもない。他者を愛しも理解しもせずに、己のために在る事柄すべてに愛情を注いで理解しようとする。なぜなら、無が存在するとして、それは内にも外にも、可能性がないことを意味するからだ。それゆえ、いかなるものも死によって根絶やしされるのでなく、形を変えるのみである。創造の根本は普遍的な空間で、神のために保たれている。その空間は、われわれ人間の立場からすれば、神の裡に、神によって、神のために存在する。万有が神の裡にあって、囲饒したりされたりしている。森羅万象、生きながら神の裡で生を閉じる。それは水滴が海水のなかで生死を迎えるかのごとくなのだ。

マドリガーレ　2

万有の空間内での定位置に神が浸透し、空間にも染み入らせる余地がある。神は森羅万象に食い込んでいく。空間は場として、あるいは下支えとして据えているのでもなく、最高の方便として存在しているのだ。それゆえ、場としての空間、塊としての肉体、行動する徳性たる行為、これらは神の裡にあって神を成り立たせている諸要素をイデアが貫いている。神は存在し、万有は神につきしたがうために存在している。神によって何かが輝くことは、それが照らされることに等しい。だが、光の陰になることもあれば、表立つこともあるが、空気中の原子のごとくつねに神は

生きている。木材は炎のなかで燃え尽きてしまうのを嫌っている。愛や美徳や感覚でこころゆくまで楽しみ、己の印、己の存在を印刷に付して、利用価値がある限り、その力は計り知れないものなのだ。

〈解題〉

汎生命的な、アニミズムの立場をとるカンパネッラらしいマドリガーレである。宇宙と相似である神にとって、その裡は全面的に全なのだ。だが神は、場として、みずからの定位置として在るのではなく、諸々の事象を含むか、それらの事象の裡におられる。場は場であり、物質は物質であることを前提としており、それらを成り立たせているのがイデアである。神は存在し（このあたりには、テレージオの思想の一端が見受けられる）、森羅万象はその結実として存在する。光り輝く灯りが、その稔りとして光輝を在らしめる。それは神の御心のおかげである。万物が流転するということは、万有を根絶やしにする意味ではなく、変転することじたいに歓びを見出すことと等価なのだ。

マドリガーレ　3

われわれ人間はかつて赤子であり、胚であり、種であり、血液であり、パンであり、草であり、また別種のものであっても、それらの裡に昔日の稔りを享受していた。そして変化することを嫌った。いま光り輝いているものは、火、大地、鼠、蛇の内部で創造されていて、好ましいものなのだ。加えて未来の事象に愉悦を見出すであろう。その訳は、万有の裡が神的イデアに照らし出されており、忘却の彼方へと葬るために光輝が必要だからである。それゆえ、凝り固まることに愛着を示すと愛は手に入れられない。つまり耐えるか、あるいはその種のものに存在の可能性を見つけるか、この二色を以て分裂を防ぐわけなのだ。すなわち、導き手であるひとがどれほどで笑いを求めてくるかで心証

が明らかになる。指導者が忌避する対象物は壊れやすい。賢人は四の五の言っても、やはり自信に充ちた死に方をする。

〈解題〉

このマドリガーレについては、カンパネッラ著『形而上学』第二巻第二部をご笑覧いただきたい。例えば人間が動物である限り、その存在を肯定的に受け止めて変容を忌み嫌う。自己評価をする際には、肉を帯びた者としての評価を好まない。現世で生きているときにこそ、歓喜が湧いてくるものだ。死後、人間以外の者になることを忌み嫌うことはない。次の段階で、自身の肉体から生まれ出るウジ虫（「ウジ主」という言葉をカンパネッラは他の著書でも頻繁に使用している）になりたがる。こうした快挙が生ずるのはほかでもない、森羅万象に神的イデアが点るからなのだ。王様や公爵になりたがる気持ちは真の欲望ではない。賢人は万物に関する知識が豊かなので、すべてにわたって変移しない。

マドリガーレ　4

生ける者は生きるがために、例えば父親と息子、教師と学生、といった関係だけではうまく行かない、その原動力（グロリヤ）を他のひとに見せるためではないからだ。なぜなら自分以外のひとたちがその場にいないからだ。大工たちの仕事は地味なものだ。みずから腐り果てないひとは栄誉を求めない。その訳を述べるひとは、多くの幕に隠され被われた永遠なる思慮を破らない。仮につねに在ったものが今もあるなら無なるものなど決して存在しない。あらゆる実体は第一存在である陽光だった。それには世界、徳性、それに理念があり、その内部には諸事実や再考された事実が、未来

永劫にわたって築き上げられている。再度考えられた事実は「新」で、元の事実は「旧」なのだ。聖なる存在の形象や影は、当初は仲がよいが、そうでなくなると、外見にほころびがみられる。

〈解題〉

この詩の主張するところは、神の裡に世界や徳性や理念が創られるという一語に尽きるだろう。「大工」の原語の訳は「建築家」だが、ここでは文脈に沿って訳出した。文末の「形象」や「影」は、人間の擬人化であろう。

マドリガーレ　5

火災が鎮(や)まなければ、この惑星は無と化し、限界状態か異常事態を招くだろう。神が限りなく善ならば、死や悪や地獄が在るとは言い難い。そうした窮地に陥る際には、正常でない場合なのだ。尊敬の念を抱くということは、ヤギを愛情こめてみつめるのなら、エニシダを愛するがごとく凝視するように、本質的問題ではない。もし尊崇の気持ちが終わりを迎えるのなら、その次には混沌(カオス)があらゆる歓びを、鉄が火を雪が冷を受けるように、染みいたらせる。そしてこのことが芸術の良し悪しを識別する素晴らしいひとのように、尊師にしてみれば、好ましいのだ。自殺者が出るなど、何たる驚きか？　運命は大いなる生のために隠微な魔術で導かれる。そしてそこでは悪や精神障害が、半音を上げ下げしたり比喩を用いたりしながら自分の歌を唄っている。

〈解題〉

神の配剤によって、無限なる善がもたらされ、悪や死や地獄とは無縁となることが、このマドリガーレの主題である。

マドリガーレ　6

いつでも移せる密閉されて真っ暗な墓のなかで霊魂は、死せることを疑い、未来がないがしろにされ、過去を忘れたことにも疑念を抱く。こうしてもっと良い人生を信じられないがため、いっそう多くの囚人や泥棒たちが辛い目に遭うのは、私見によれば、憎悪に終始するからだ。さて霊魂は不透明な棲まいである肉体のなかで、自己自身を顧みずあの世でも生きられず、だから見神も無理なのだ。獄中から霊魂は何かを垣間見る。そしてなぜ自分が存在するかを問いかけるように、霊魂はからだを起こして育て上げる、ムチで以て導きながら。静寂とはどのようなものでどうして出来上がるのか不明だ。霊魂が一瞬の光だからだ。かくて暗闇のなかで作業をするひとは、みずからの手先は見えずとも、バルコニーからの光が室内に差し込んでくると、再度の話し合いを持ち、検討が再開される。

〈解題〉

霊魂が肉体や真っ暗な墓のなかに宿り、その屍の主の過去や未来は不明で、現在には充足していると述べている。

マドリガーレ　7

あらゆるもの、植物や獣や人間の魂は、彩り豊かな神の裡にて創造され、未知なる技で支えられているのなら、神よ、あなたは強靭だ、三者が棲まう場にて導き手となり、神にしたうことになる、それは例えば、著述家にとってのペン、盲目者にとっての筆談のようであり、あるいは肉体と霊魂、全存在と霊魂のごとしでもある。ともあれ、霊魂なくば何も出来ない、実在、能力、知恵、愛情、行為は、われわれの裡なる情熱であり恵みでもある。それは自己や

多くの事柄を愛し、みずからや多岐にわたる事案を知覚し、感情の対象となる。愛が感覚との芝居を愉しむのは、祭りが催されるからだ。だが、そこで歓喜は定着せずに、歓びながら愛に歓びを賦与する。その一方で、愛し合い理解し合っている。

〈解題〉

この詩のテーマは、万物が神によって創造されるという一点にある。

マドリガーレ　8

さて、ぼくたちは獄中で果てるのでなく出獄して死す、壁を背にムチ打たれ、牢獄には入るには狭い道を通って、充分とは言えない誤った知識を得てしまう。なぜ、間違った愛情の下に生まれてきたのか。ここに、空気、土、それに死のみをぼくたちはありがたく思う。こうしてぼくたちは死を迎えずに、自由な知覚に愛を傾ける。しかし獄中で過ごさなくてはならぬひとにぼくたちは愛情を注ぐ。天上に上がっていくひとたちを誤って憎んだりする。冷やかしてみよう。運命がぼくたちや太陽の光を隘路でとどめてしまう。これこそまさにあなたの玩具に役立つもので、決して死にはしない。尊大な霊魂、古代のひとたちの思惑にあなたはいつもさらされている。おお、あなたといつまでも仕合わせに自由に、研ぎ澄まされた感覚が、すべての生を導くことになる。死を飼うことでなく、冥界の主ハーディスと場をともにするのでもない。

〈解題〉

人間にとっての仕合わせとは、人生を愉しむことが出来るひとだと述べている。「ハーディス」は、ギリシア神話で冥界の神。ローマ神話では「プルトゥ（プルートー）」に該当。

マドリガーレ　9

カンツォーネは不幸にさらされた宇宙の創始者に向かって、美、善、幸を謳い上げつつ、創造主と他のすべての被造物を見分ける。その部分、視点、成果に関して、及び、それら三つにたいして。かくも公平なのは、原子が変化を繰り返しながら回転し混乱に陥るからだ。つねにかつてあったことは、これからもあり、欲を持たぬとも充足をもたらすからだ。あたかもあらゆるひとたちが驚いて言うように、レテがその水で大いなる秘蹟を行なうときに。

〈解題〉

詩のなかの「かつてあったことは、これからもあり」は、『伝道（コヘレントの言葉）の書』第一章の第九節による。「レテ」とは、ギリシア神話の、黄泉の国を流れる忘却を意味する川のこと。

32　尊厳と、その真なる徴（しるし）とその過（あやま）てる徴について

ソネット

われわれはその気持ちの底に、思慮分別と美徳より尊厳なるものを受け留めている。尊厳は工夫を凝らして扱えば稔り育ってゆく。そして真なる証拠を得る結果に終わる、存在することがそうであるに違いないがごとくに。

しかし美徳それじたいから光が出ないなら、尊厳性の有する豊かさなど、まったくの誤謬で取るに足らないものなのだ。流血がそうであって、そのことをぼくに告げるのは遺憾である。つまり、知識なく、信憑性がなく、活発でなく、重苦しいのだ。

汝、ヨーロッパは、巡り合わせよく、おおいなる損もいとわず、敵トルコ軍をみつめて、かの国を称えるよりも、トルコについて正確な情報を得るべきであろう。

慣れてきたら、樹影、枝葉、根ではなく、熟した果実を規準にして見極めるのはほかでもない、多くの大切な事柄がないがしろにされてきているからである。

〈解題〉

尊厳性の母は思慮分別と美徳である。都合に見合った方法で処すれば、尊厳性は育ってゆく。不具合なく上手に塩梅することは、尊厳性の成長にあたって、真なる証拠となる。そして豊かさや名誉よりもいっそう劣悪なのが流血だ。さらに続けて言うに、名誉となれば、尊厳性よりももっと確かな証拠が必要であろう。これは、目下のところ、ヨーロッパのなかの富裕層に与えられるだろう。われらの敵トルコが、流血でなく美徳のみをもっぱらみつめているわけは、尊厳さを自在に駆使して自由を手にしているからだ。仮にトルコが真実の美徳を知悉しているのなら、それが要因で、巧みな手腕を発揮して世界の覇者となるだろう。

33　庶民・大衆について

庶民とはさまざまに寄り集まった獣たちであり、自分の腕力には無知だが、木の樽や石の樽を持ち上げることが出

来る。それに気がつかなかったのは、少年期に体験していなかったからなのだ。
庶民はその膂力で破壊行為をなし、その力を蓄え、かつ奉仕に用いる。どれほどその威力が恐れられているのかは知られていない、それはおおきく膨れ上がるからだ。感受性が豊かで魔法にかけられたようなのだ。
なんと驚いたことか！　力まかせに庶民は喧嘩を売り、投獄される。一カリーノを賭けて相手が死んだり、戦争が起こったりしても、国王にどれほどの損害を与えられるというのか。
すべてが天地間に在るが、庶民はそれを知らない、たとえある人物がそれに気づいていても。

〈解題〉

庶民の獣性については、これまで誰もまっとう巧みに書いてはこなかった。庶民にその善性を認めるひとたちは、その能力や獣性そのものの種類を示さなかった。「なんと驚いたことか！」――これは獣性を有効利用してもらいたい、という願いである。モーセの物語には、どれほどの人数のユダヤ人がみずからの解放軍によって妨害された際、獣性を発揮したかが描かれている。「一カリーノ」はナポリ王国の貨幣。一〇〇リラに相当。

34　此岸での悪意、彼岸での損傷とは何か、そして善意はあらゆる方面を嘉するのか。

すべての過ちはそれじたいが精神的苦痛であり、苦渋のなかには精神や肉体や名声が含まれている。みつけ出さなければ、少しずつ苦しくなって、家財や血液や友情がいためつけられる。
もし意欲に対抗するのなら、意欲そのものが苦悩ではなく、真の罪など存在しなかったのだ。つまり、拷問を望むのなら、拷問たるや愛であり、マグダラのマリアにしてみれば甘美なものとなる。彼女はみずから判決を下したので、

有徳のひとと称される。

本当の善意を意識するには、人間を野獣にするだけで充分である。片や、繕ったり無名を装ったり威厳を保ったりすることは不幸である。

すなわち魔術師シモンが言うには、霊魂に衣装を着せたいと述べるときに、生命（いのち）や運命が予言できる。

〈解題〉

名声を得るために詠われた着目すべきソネット。悪事を働くとすぐに人間は罰を科せられる。本当の悪事でない場合には、欲望にたいして罪に帰せられない。つまり、意識が明確だと、ひとを歓ばせることが出来る。たとえ霊魂が息絶えても、純粋かつ善良に生きるひとは、論難されるひとよりも、意気軒昂である。「魔術師シモン」とは、新約聖書『使徒行伝』第八章による。シモンはサマリアの魔術師として多くの信者がいたが、使徒フィリポによって洗礼を受けキリスト教徒になる。ペテロとヨハネが宣教に訪れたとき、彼らの聖霊を授ける力をみてその力がほしくなり、金で売ってほしいと持ち掛け叱責を受けた。それ以後、聖職売買のことをシモンの行為にちなんで「シモニア」と言う。

35　邪（よこしま）な君主はみずからの共和国の頭脳足り得ないこと

ごく普通の共和国をないがしろにするのは、精神ではなく肉体である。われわれのからだから四肢が取り払われると、富と歓喜ではなく、苦境に溢れ返る。君主は蝉の鳴き声が止めるがごとく、苦渋と苦慮を根絶やしにする。

クピドー（エロス）のように、少なくとも穏やかにわれわれを揶揄し、荊妻の膝元からは経血が滴り、活力も発揮

されて、新たなひとびとを創り出す。そのためには、われわれを破滅に追いやって、引き裂いてしまう必要がある。しかし不愉快な嘘をついて器のなかや大地の上に、君主は小便をまきちらす。それでは道徳的な事柄に何らかの褒美を期待することは出来ない。

肉体が貧弱な場合でも、鼻の穴がみえる頭は導き手としては小さすぎる。目でも、耳でも、口でも、成り立つ会話が首尾よくいかない。

〈解題〉

エピクロス的でマキァヴェリ主義派の君主は、共和国が精神でなく肉体であることを示すにあたって、機敏で博学的方法として哲学者が述べるように、存在の本質を解けばよい。「ぼく」（カンパネッラ）が君主は心あるいは頭脳だと言っても、霊魂を扱うのは宗教の分野である。このことは、一六〇五年に「ぼく」、カンパネッラが反アリストテレスの立場で著わした『救世主の君主国』（出版は、一六一八年）になかに記されている。第35のソネットには注目して頂きたい。鬱気味の君主は、なんら希望も抱けずうんざりした表情で食事を摂る。目もみえず、話も出来ず、耳も聞こえずに。

36　ギリシアの作り話を用いて詩作に

心を寄せるイタリア人たちへ

〈解題〉

最初に、大まかな解説をしておく。

この題の意味するところは、「36」全体がカンパネッラの精神性のひとつを顕わしている点だ。基本的にカンパネッラの思想は、キリスト教が異教精神の枠のなかで存在すること、それがもう無理なこと述べている。哲学的思索の裡で異教と相対することの必要性に光を当てているが、詩作がギリシアの詩や作り話より下位に置かれていることを嘆いている。イタリアの詩人を戒めているのである。

マドリガーレ　1

ギリシアは、陸に囲まれた海とは名ばかりの海を越え、狡智を働かせほとんど戦わずして金の羊毛を求めトロイを征服した。そのあとに全世界を作り話で言いくるめて、見事に賛美をわがものにしている。イタリアはその作り話を褒める一方で、イタリアみずからに、また神にたいして、何たる過ちを犯していることか！　イタリアは、策略を使わず知恵と力で、世界中に、海と土地とを獲得し、ついに天上界の鍵まで掌中に収めた！

〈解題〉

カンパネッラは、イタリアの詩人たちがギリシア人の嘘を謳い、真実を詠じないのを嘆いている。ギリシア人たちは金毛羊肉やトロイ戦争のことを除いてなにも謳いあげていないからだ。

マドリガーレ　2

クリストフォロ・コロンボは大胆な天分の持ち主で、皇帝とキリストのために、二つの世界に橋を架け、広大な海

原を手に入れた。彼は数学者の抑圧に打ち克ち、詩人の情熱に勝利し、自然学者、さらに神学者の夢想を、そして、ヘラクレス、ポセイドン、ゼウスの大業を越えた。アルゴー船隊の著名な舵手で卑劣なティーピュスは天上の王国を奪った。コロンボほどの英雄は、自身の目とからだで、ギリシアの詩人、哲学者，神学者が脳裡に想い描いていた土地をみたのだ。

〈解題〉

「コロンボ」とはかの有名な「コロンブス」のイタリア語名である。自分の目で新大陸をみたコロンブスと詩・哲学・神学などの観念のなかで未知の世界を空想したギリシアの知識人たちを比較して、前者に軍配を上げている。カンパネッラはガリレイと親交があり、感覚的認識を重視する人物であった。「ティーピュス」は、アルゴー船団の舵手。「アルゴー」は金の羊毛を求めに赴いた英雄たちが乗った船団名。

マドリガーレ　3

新しい世界にアメリゴという名を与えたひとは、有名な著述家たちの生地で生まれた、他の誰よりも、故郷フィレンツェを寿ぎ、その名を轟かせた者はあなたを措いてほかにいない、けれどもあなたもまたあなたの栄誉を謳う詩の友を持たない。ギリシアの偽りの神々や見せ掛けの英雄たちのもつれ合いをギリシアの詩人がまことしやかに語った。イタリアよ、カトーがこう予言していたぞ、ギリシア人があなたたちの詩人の目に異見を唱えて覆ってしまう幕、つまり、異邦人は、あなたたちイタリア人から武器、栄光、精神、肉体を略奪することを請け合うだろう、と。

〈解題〉

フィレンツェ人、アメリゴ・ヴェスビッチ（一四五四―一五一二年）は航海に出て、新世界の主たる地域を発見し、「アメリカ」という自分の名前に真似た名称を付した。（大）カトー（前二二四―前一四九年）はローマの将軍・政治家・文人。

マドリガーレ　4

立法の碩学者たち、ヤヌス、サトゥルヌス、ピュタゴラス、そしてヌーマ・ポンピリウス、ヴェトトゥムヌス、ルクモーネ、クーマエの女神、ティマイオス、さらに多くの他の偉人たちを忘れる者は誰なのか？　イタリアは自国の光輝あふれるひとを葬り、他国の燭台持ちに成り下がっている。アリストテレスを愛するあまり、自然を尊んだテレージオを喪ったことを嗟嘆しないまま、アリストテレスの曙光に太古の賢者たちの影が薄まった。忘恩の町スティーロに名誉を与える者を、新たな苦しみにひたしてつねに傷つける。

〈解題〉

「ヤヌス」は「物事の初めと終わりを司る神」。「サトゥルヌス」は「農耕神。ギリシア神話のコロヌス」。「ヌーマ・ポンピリウス」（前七一五―前六七三年）はローマ帝国二代目の皇帝で、ローマの宗教上の諸制度を確立。大神官・神託官などの神職を設けた。「ヴェトトゥヌムス」は「四季の神」。「ルクモーネ」は「エトルスク時代の世襲制最高執政官名」。「クーマエ」は「イタリア半島に初めて築かれた古代ギリシアの植民市、ナポリの北西に位置した」。「ティマイオス」は「カラブリアのロクリ生まれの古代ギリシアの哲学者」。「テレージオ」は「カンパネッラの精神的・

学術的師。後述する」。「スティーロ」は「カンパネッラの生地。生家が遺されている」。
アリストテレスに好意的なひとたちが、カンパネッラの師であるテレージオを軽視したことを、カンパネッラが難詰している。

マドリガーレ　5

私的な妬みと利害とがぼくのイタリアを腐敗させている。イタリアは無知と不和でなすすべもなく、救国の意志ある者たちを解き放ちもしない。健康美あふれるイタリアはみずからを抑えつけ、美徳を隠しなおざりにしている。しかしイタリアはローマ帝国の下では、美しくて愉しく、全世界に知られていた。帝国は選ばれた者たちで成り立ち、全宇宙を合わせたものよりも文芸や武力の点ではるかに秀でていた。だがいまは実を言うと虚偽の伸吟の下に置かれている。

〈解題〉
読んでそのまま理解できる率直なマドリガーレだ。

マドリガーレ　6

ロクリ、ターラント、シーバリ、そしてクロトン、サンニオ、カプア、フィレンツェ、レッジョ・ディ・カラブリア、キューゼ、ジェノヴァ、またその他の都市は栄光から見棄てられたが、ひとつひとつがギリシアと較べられ得る。ローマは異質である。ローマは全世界、すべての事どもと伍している。あるいは、処女と人妻の栄誉であるヴェネツ

ィアはギリシアに真に褒められても謙譲の徳を失わず、海を泳ぎ、陸で咆哮し、福音書を携えて空を翔ける、翼のはえた魚であり獅子である。

〈解題〉

「サンニオ」は現在のラツィオ地方の南東地域」。「キューゼ」は「トスカナ地方南部、エトルスク時代に栄える」。

マドリガーレ　7

ギリシアはヘラクレスとジュピター、そしてアッシリアとエジプトの神々からその行為を奪い、その名と英雄的行為を、テーバイ人やクレタ島人、それにアカイア人のおかげとした。真率なる神よ、プラトンはこれを肯定するが、あなた方はギリシア人が誤ってわが物として叫んだ神殿や学問を曖昧にしている。さらに過てる歴史を通してギリシアを賛美し、ギリシアのためだとした。そしてギリシアはヨーロッパのひとたちから与えられた独自の起源や名前を正しいと称している。

〈解題〉

ギリシアへのあてつけともとれるマドリガーレだ。

マドリガーレ　8

他国の民はこれらの伝説を受け容れた、しかしイタリアほど頻繁に受容して他国と比べて恥をかいた国はない。イ

タリアがヤヌスであったノアから法律、技術、犠牲を受け止めてきたことに疑念を挟む余地はない。爾後、もっと多くの事柄を知りたいひとにたいして、ロムヌス――ファビウス、スキピオス、その他――を祖先とする、どんなに小さな家族でも受け容れてきた。その数にかんして、ギリシアの英雄たちすべてを生み出した歌を唄う夢をみる男たちは間が抜けている。血筋の良いラテン人はそれなりの生き方を、過てる不純にたいして反駁するのを旨とせよ。

〈解題〉

カンパネッラはイタリアを愛するがゆえに手きびしい面がみられる。

37　イタリアについて

ソネット

ルビコン川でカエサルの前に立ちはだかった偉丈夫な女は、自滅するのを恐れた。それゆえカエサルの軍勢は敵の兵士も引き入れて増えたようにみえた。

女の四肢は惨めにばらばらとなり、跨（またが）っている馬のたてがみも千切れてしまって、不運な奴隷のようだった。ディナの名誉のために恥辱を加えたことへの復讐にと、シメオンとレヴィの兄弟はディナが辱（はずかし）めをうけた事実をまだわかっていない。

いまや、エルサレムやローマは物の道理や天上界や地上界を支える、ナザレやアテネに訴えなくてもよい。

最初にディナに最高の栄誉を示すひとはひと花咲かせたいだろう。なぜならヘロデ王のような人物はみな異国のひ

とであり、贖罪のパンの種をとっておくことなど約束しないからだ。

〈解題〉

「ルビコン川」は、共和制ローマの時代の、本土と属州（ガリア・キサルビナ）を分ける北イタリアの川の名称。カエサルの言ったとされる「賽は投げられた」で有名。この成句の意味は「もう帰還不能限界点を越してしまったので、最後までやるしかない」である。

このソネットは「創世記」の第三十四章「シケムでの出来事」に基づいている。「ヤコブとレア」の子供たちが、「シメオン、レヴィ、ディナ」の三人。末娘のディナがシケムに凌辱され、監禁される。妹の栄誉のために、兄二人が、シケムを殺して、ディナを救出する。

「ヘロデ王」（前七三―前四年）は、ユダヤの王様。「エルサレムとローマ」は「平和」の、「ナザレとアテネ」は「花」の象徴。

38　ヴェネツィアへ

アッティラ王の苛烈な侵攻でイタリアに洪水が起こると、
損害のはなはだしいなか、
内陸のひとたちは海のなかに正しき種を植えた。
　この地は秩序が乱れ、
隷属の身となったが、

力と知のある英雄たちが、純潔な処女地を、
生命の糧となる稔り豊かな母となした。
　世界の驚異、ローマの敬虔なる姪、
イタリアの栄光、偉大なる支柱、
知恵を絞って短絡的政治決議を避けようとする君主、
　牛飼い座にも似てよもや沈むこともないように、
じっくりと仕合わせな王国を営み、
この苦難の世に
自由を守り抜いている。

〈解題〉

アッティラ（四〇六頃―四五三年）は中央アジアの遊牧民フン族の王。軽装騎兵による迅速果敢な攻撃で、西欧から「神による禍」と恐れられた。四五一年、ガリアに侵攻したが、アエティウスの西ローマ軍と西ゴート軍の連合軍によって敗北した（カタラウムヌスの戦い）。

39　ジェノヴァへ

アルノ川の妖精（ニンフ）であるピサやリヴォルノ、それにアドリア海の女神、
ラテン民族の御旗が、シリアやパレスティナ地方を、そしてギリシアやナポリに寄せくる波を大切に守った。

思い切った産業の振興策がジェノヴァを支え、その他の都市を頭ひとつ抜きん出た。アジアの各地、アフリカやアメリカの海岸を、ジェノヴァ人コロンブスがいなければ知ることが出来なかった。

けれどもコロンブスよ、スペインにとっては異国のひとであるあなたよ、ささやかな報酬のために、スペインに勝利を譲ることなかれ、

学歴はないが、強靭な手足の持ち主なのだから。

女性名詞であるジェノヴァよ、

スペインは、奴隷たちに金属を掘らせて、

国民の人気を勝ち得ている。

〈解題〉

「36」の「2　マドリガーレ」にも出てきたコロンブス（一四五一――一五〇六年）はイタリア人でジェノヴァ生まれ。そのラテン語名をイタリア語で記すと「コロンボ」となって、小文字では「鳩」の意味。ジェノヴァでの少青年期は家業の毛織物業を手伝った。教育はほんとんど受けていない。二十代後半にアジアへの航海を企図してポルトガル王に援助を乞うが断られてスペインに向かう。有力な聖職者たちの尽力で女王イザベラの説得に成功。王妃が国王フェルナンドを説き伏せた。一四九二年、スペインから新大陸目ざして出港した。この航海も含めて四回の航海を行なった。

40　ポーランドへ

国の統治を担い、運命を継承する国王について、
ポーランドよ、貴国は、国の礎を築く一方で、皇太子から、位の低い他のひとたちにいたるまで、王の死去に涙して頬を濡らしはするが、王権の印である笏（しゃく）を放棄したことはない。
見識の持ち主や力強き者ではなく、貴国を瓦解させる悪運を背負って、確信を持てずに集合離散を繰り返している者がいる。それなのに、恵まれかつ豊かな宮廷に暮らす王がいるなど信じられぬことだ。
ああ、なんたることか！　国民は、慎ましい幕屋暮らしで熱意も失せ、カトー、ミノス王、ポンペイのひとびと、それにトリスメギストゥスを探し求めている。神が、そのような目的の探索を否定してはいないからだ。
大量の流血や肉片の飛び交う惨劇はのぞまない。美徳や勇敢な行為を承知で、国益を大きくしようとするつもりなのだ。

〈解題〉
ポーランドはドイツとロシアに挟まれて、なかなか独立が出来なかったが、ヤゲロー朝時代（一三八六―一五八二年）に繁栄をみる。カンパネッラが知り得るポーランドはこの時期のポーランドだろう。ポーランドの有識者はかつて、世襲制よりも選挙による国王の選出をよしとしたが、選挙を悪用して、われこそは、と他を押しのけて王位に就くものが出てきて、国はすたれた。神は国民が国の政策にいつも従順である必要はないと言われている。それゆえ、ここでカンパネッラが取り上げているのは、ポーランドの政体にかんしてであろう。ポーランドは独自の「選挙君主

制」を布いていた。ポーランド共和国では十六世紀から十八世末まで、「世襲君主制原理」を否定して、「国王自由選挙」が実施され、十七世紀にヴァーザ家の国王が絶えたあと、実際世襲は行われなくなった。これは一見、画期的な政策に思われがちだが、上述のように、国運は繁栄よりも衰退に向かったと言われている。

カトーには、大カトー（前二三四―前一四九年）と孫の小カトー（前九五―前四六年）がいるが、民主制を堅持したんは後者。ミノス王は古代クレタ島の王。ポンペイはナポリ湾に面したローマ時代の都市。七十九年、ウェスウィウスの噴火によって埋没するまで農商業都市として繁栄。トリスメギストゥスは、「ヘルメス・トリスメギストゥトス（三倍に偉大なるヘルメス）のうちの、「三倍に偉大なる」の意味。ここではヘルメス神（神々の使者）を指していると思われる。

41　スイス人とクリニーニ人へ

仮にあなたたちがより高き天やアルプスの山々の城塞に目を馳せれば、自由自在に相互の存在を見定めることが出来て、保守的専制君主の支配する帝国を維持し得るであろう。

一片のパンのためよく考えもせずに流血に及び、善悪の見境もつかず自慢の膂力（りょりょく）をみせつけてしまえば、それがためにあなたたちの徳などは踏みにじられる。万事にわたって自由であったり桎梏（しっこく）の身であったりするが、白いマルタの旗を草原に建てよ。

ああ、なんたることか！　英雄たちとともに邪悪なトルコの専制君主から、

手枷足枷の民たちを助けに赴（おもむ）きもしたが、民は身をもちくずしていた、このかなしさよ。

〈解題〉

「クリニーニ人」とはスイス連邦の東側に住んでいるひとびとを指す。スイス人は、その昔からその膂力を買われて傭兵として重用された。現在、ヴァティカンの聖ピエトロ大聖堂を警護しているのはスイス人からなる近衛兵である。マルタとは、ラザロとマリアの妹。

42　聖ルカと、聖ヨハネの「労働のない信仰は死なり」、それに聖アウグスティヌスの「汝は信仰によって個我を明らかにし、わたしは労働を明白となす」というキリストについての寓話に基づいて詠まれたソネット

ローマからオスティアへ、哀れな男が歩いていたが、悪党に身ぐるみはぎとられ傷も負っていた。その男は幾人かの聖なる修道士をみてきた。彼らは聖務日課書を唱えながらも、男を避けて進んだ。

司教が通り過ぎた、男に目もくれず十字架と祝福だけを与えた。

さて枢機卿（すうきけい）たちは情の深きを装って、強奪品を欲するがゆえに、悪党たちのあとについて行った。

ついにドイツ人ルターが到着した、彼は労働を否定して信仰を肯定した。男を篤く迎え、衣服を着せ、健康を与えた。

この一連の行為で、誰が従前よりいっそう利益を得るか？　より人間的なのは誰ぞや？　それゆえに知性を欲する者は屈するのだ。信仰から労働へ、口から手へ、

その一方であなたやそのほかのひとたちを信ずる者は善良かつ誠実で、知識の有無が問題なのではなく、確実に行ないが真にして善なるのが試金石なのだ。

〈解題〉

カトリックの聖職者の腐敗を詠み込んでいる。ルターの宗教改革（一五一七年）の発端は、教皇庁の発行する「免罪符」だった。腐敗や乱脈はローマ教会のみならず、托鉢修道会にも及んでいた。マキァヴェリ（一四六九―一五二七年）の後半生の友人にフランチェスコ・グィッチャルディーニ（一四八三―一五四〇年）がいる。かれは二代の教皇に直接仕えた人物で、優れた史眼の持ち主でもあった。『備忘録』という名著を残しているが、そのなかでこのようなことを言い切っている――わたしは教皇聖下に仕える身だが、いまの教会の現状をみるにつけ、ルターの教えのほうに肩を持ちたくなる、と。

43　詭弁者（ソフィスティ）と偽善者（イポクリティ）、異端者（エレティチ）と奇蹟を起こす虚言者（ファルシ）たちに対抗して

誰もあなたに言わない――ぼくが独裁者だと――ぼくが偽（アンティ）キリストだ――ともあなたは言えないし、言えもしないだろう。けれども、抜け目なくよこしまで意地の悪いひとは、聖徳に賭けて、己が受けた傷をあなたになすりつける。

さて、悪賢い詐欺師、売春婦、それに強奪者は、信心深くはないが貯えはある。それゆえ、悪質だとみずから認めざるを得ない、というのも他のひとたちに見破られてしまうからだ。

あなたは自分を守ることが出来る。ぼくは守れずにたやすく屈服してしまう。自家撞着や他者攻撃にいたるパリサイ派に対抗するサマリア人を、神は選ばれた。

声ではなく、奇跡でもなく、善と張り合うのでもなく、実際、多くの神々がこの地上に一定の規範をしつらえた。

〈解題〉

パリサイ派はユダヤ教正統派と称されている。古代イスラエルの第二神殿時代（前五三六―後七〇年）に存在したユダヤ教内部のグループで、現代のユダヤ教の始祖となっている。サマリア人はユダヤ人にイスラエルの血を穢した者と言われ、迫害を受けたものの、イエスは「隣人」として接した。このソネットでは、神がサマリア人に手を指し延べているのがうかがえる。

44　「43」と同じテーマについて

誰もあなたに――ぼくは詭弁家（ソフィスタ）です――とは言いたくないだろう。けれども実の伴わない学び舎は貧弱で、わずかな知識を盾に虚言ばかりを生み出すだろう。それは四福音書（エヴァンゲリスタ）の著者である、マタイ・マルコ・ルカ・ヨハネをわが手に引き寄せたいからなのだ。

しかし七つの哀しみを抱いたアレティーノは、葡萄酒の貯蔵庫のなかで、花なる賛美や棘なる批判を披露しながらも流言飛語に囲まれ、冷笑を浮かべて葡萄酒を煽っている。善きにつけ悪しきにつけ、その姿はご覧いただける。

詐欺ではなく遊びのために、さらにアレティーノ自身が羞恥心に包まれるときがあるので、苦悩を抱えている己以外のひとたちの哀しみを想うことが多い。

それゆえ他のひとに代わって喋り、いつも本を注意深く読み、嘘で身を固め、思うようにならぬ身をみつめている。

〈解題〉

ピエトロ・アレティーノ（一四九二―一五五六年）は、ヴェネツィアを中心に活躍したイタリアの風刺作家。

45　偽善者（イポクリティ）に対抗して

プラトンに愛情を注ぐと、イエスという名前の核心へと導かれ、額に印が刻まれる、なぜなら外見からイエスを眺めて判断しているひとにとって、君主の邪気こそが問題になるからだ。

おお、神よ、もしくは思慮分別よ、さらに信仰の術（すべ）たる聖器具よ、あらゆる活力に充ちた広大な泉よ、ぼくに力を与えたまえ、ぼくにはそれらを進んで受け容れる意欲がある、だから多くのひとたちが栄誉あることを成し遂げるのを目にすることが可能なのだ。

あなたの慈愛あふれる名前へと、また誠実で純粋な真実へとぼくを誘う熱意は、それをみるにつけ、ぼくは自身を負の領域へと追いやってしまう。

あまたの災難に耐えられるひとは、予言の出来るものを聖器具と名づけて、墓のなかの屍（しかばね）を掘り出す能力を持つひとでもある。

〈解題〉

とても勢いにあふれるソネットで、カンパネッラが「神」からの「力」を欲しているのがわかる。